

写植屋さんと私

写植屋さんと私

小形克宏

一九八一年一月十二日、西新宿六丁目唐川ビル

「小形くん、ちょっと来て」

村西さんは奥の編集室から顔だけ出すと、そう言って作業室で荷造をしていた私を中へ招き入れた。ここは西新宿の外れにある唐川ビル。青梅街道からすこし入った裏通りにある、ビルとは名ばかりの薄っぺらな二階建。その一階に『P』編集部はあった。大学三年生だった私はずっと以前から愛読していたそのマイナーなマンガ情報誌の片隅に「無給スタッフ募集」の記事を見つけ、飛びつくように応募した。すると十人近くの集団面接でなぜか一人だけ合格、前年十二月からタダ働きの雑用係として働きはじめたのだった。

まもなく、人々が交わす四方山話から、少し前に編集部的主力が内紛でごっそり抜けた

こと、だから現在は極端な人手不足に陥っていることを知った。道理でいつ行っても閑散としていた訳だ。

数カ月後に四年生になる私にとって、就職は嫌でもやってくる現実だ。しかし三流文系私大の学生にとって零細出版社だって高嶺の花であり、自分より優秀な他大学の学生に交じって就職活動をして、正社員として採用してもらえとは到底思えなかった。

それでもどうにかして出版業界に潜り込めないかと思い、早めに手を打つつもりで応募した私にとって、この状況は紛れもなくラッキーと言えそうだった。ところが入ってから一カ月、バックナンバーの発送や、作家リストの清書など、あまり編集とは関係なさそうな単純作業ばかりやらされていた。そこに村西さんのお招きだ。

村西さんは私より数年先輩、早稲田大学を留年し続けているという噂だった。男性ながら『妖怪ハンター』の稗田礼二郎みたいなストリートロングで、物静かだけど怒らせるとちよつと怖そうだ。村西さんは人気のない八畳ほどの編集室で、自分の机の隣りに私を座らせると言った。

「今日は小形くんに編集の仕事を教えるね」

彼は自分の机の上に並べられた『P』のバックナンバーから一冊を抜きだすと、ページを開いて私に見せながら言った。

「ウチに限らず、どんな雑誌も版下といって、この誌面そっくりの原形を作り、それを印刷しているんだ。ウチは記事の担当者が自分で版下制作することになっているから、まずその作り方を覚えなさいといけない。でも版下を作るには向き不向きもあるんで……」

そう言つて村西さんは、私のことを探るように見た。

「ひとまず今日は、版下を作るために必要な、写植の出し方から覚えてもらうね」

「写植……？」

「うん、版下の文字の部分を写植というんだ。原稿を写植屋さんに持って行つて、それを写植機という大きな機械で打ってもらい、打ち上がった写植をきれいに切り抜いて版下用紙に貼っていく」

そう言つと、開いた『P』の本文の部分を指さすと言つた。

「この文字も筆者の原稿を写植で打ってもらつただけど、写植屋さんが打つためには原稿だけではなく、それをどんな種類の文字で、どんなサイズで打つのかっていう〈写植指定〉が必要なんだ」

村西さんは机の一番上の長い引き出しを開けて、透明のプラスチック・フィルムを取り出して、私の前に置いた。なんだろうこれは、升目がびっしり印刷されている。縦に一行ごとに並んだ升目は、右端は米粒のように小さいが、左に行くほど大きくなっていき、左

端は一円玉ほどの大きさだ。

「これが級数表。写植の大きさとか行間を測るもの」

よく見ると、縦長の級数表の上端に右から左に〈7〉〈8〉〈9〉〈10〉〈11〉……と番号が印刷されていて、その番号のすぐ下に同じサイズの升目がずらっと下端まで伸びている。番号の最初の方は順番に一つずつ増えていくが、途中から二つ飛ばし四つ飛ばしになり、最後の方は〈32〉〈38〉〈44〉……となり、左端は〈62〉だ。

「たとえば〈9〉というのは九級、〈50〉は五十級というサイズで、その横に並んでいる升目がそのサイズの原寸なんだ。たとえばね……」

そう言うと、村西さんは級数表を本文の上に当てた。しばらく級数表を両手で細かく動かした後、動かないように抑えながら言った。

「見てご覧」

なんだろう。私は腰を浮かして村西さんの手元を覗き込む。見ると一ページ四段で組まれた本文のうち、一番上の段に級数表が重ねられている。

「最初の一行目」

言われて本文冒頭の行を見ると、本文の文字が級数表の升目の四角にまるで原稿用紙のようにびたりと収まっている。升目の列の上には〈9〉と書かれている。

「九級の升目にきっちり合っているでしょ。ところが……」

村西さんは級数表を少し左にずらして、隣の〈10〉の升目に一行目を合わせた。今度は行頭の文字は合っているのに、行末に行くほど少しずつ升目と文字のずれが広がってしまっている。

「隣の十級の升目は合わない。だから、文字サイズは九級というわけ。それだけじゃなくて字詰め、一行あたりの文字数も測ることができるよ」

そういうと、また一行目に九級の升目を合わせた。本当だ。縦に並んだ升目には、十文字ごとに〈10〉〈20〉〈30〉……と数字が入り、文字数が分かるようになっていて。さらによく見ると、五文字目、十五文字目、二十五文字目……と五文字分ずれた十文字ごとの升目に〈●〉のマークが入っている。

「でも、級数と字詰めだけ指定しても、写植屋さんは打てない。これを見て」

村西さんは、今度は級数表をそのまま九十度動かして横にすると、また両手で文字に合わせて細かく動かした後、級数表を固定して言った。

「ほら」

今度は各行の一字目を横断するように級数表が当てられている。みると、文字のサイズより三段階大きい十二級の升目の中央に、行頭の文字がぴったり収まっている。しかも

最初の行から最後の行まで全てだ。すごい、一枚の級数表でいろんなことができるんだ。

「行と行の間隔を行間といい、単位は歯で表す。〈12〉の升目に合っているから、この写植の行間は十二歯という訳。歯というのは写植機を動かしている歯車からきているらしい。ちなみに、級と歯は同じだけど、文字サイズを表す時だけ、歯ではなく級を使い、それ以外の行間なんかでは歯を使う。分かるかな、ちょっと自分でも測ってみて」

そう言って村西さんは私に『P』と級数表を渡した。

「テンとかマルがあるとずれちゃうから、そういうのがなるべくない行を探すといいよ」

私は『P』をめくっていくと、片端から級数表を当てていった。そうか、今まで知らなかったけど、いつも読んでいる本や雑誌の文字って、全部こうやって作られていたんだ。私はワクワクしてきた。なんか世界の秘密を教えてもらったみたいだ。そんな私を見ながら、やがて村西さんは自分の机の上に立てかけられていた、古ぼけた大きめの茶封筒を抜きとった。

「これはさっき写植屋さんからもらってきたものだけど……」

中から表面がツルツルした厚手の白い紙を取り出して言った。

「写植っていうのは、これ」

そこには小さな文字が一定の字詰めで、全体が四角い箱のように印字されている。そ

う、いつも私が読んでいた雑誌の本文そのものだ。村西さんは写植を机の上に置くと、今度は封筒から十枚ほどの原稿用紙の束を取り出して、隣に置いた。

「これは写植の元になった原稿。ほら、原稿用紙の余白を見て。赤鉛筆で何か書いてあるでしょ。これは僕が書き込んだ写植指定で、文字の種類、級数、行間、字詰めなんかを指定してあるの」

原稿用紙の何も書かれていない部分には、大ぶりの赤鉛筆の字で〈M、9 Q 12 H、1 L 18 W〉と殴り書きされていた。なんだこの暗号は。

「この〈M〉というのが文字の種類で明朝体の〈M〉。〈9 Q〉というのは文字サイズが九級ということで、級を早く書くために〈Q〉にしている。〈12 H〉というのは行間十二歯で、やはり歯を早く書くために〈H〉にしているんだ。〈1 L 18 W〉というのは〈1 L 18 W〉が一行当たりという意味で、〈18 W〉が十八文字、つまり〈一行十八文字の字詰めで打つ〉という意味。この文字の種類、級数、行間、字詰め、四つさえ指定すれば、写植屋さんは文章を打ってくれるんだ」

「四つさえ……」

「そう。ついでに言うと、うちは情報とかコラムみたいに短い文章は9 Q 12 H、評論みたいに長めの文章は10 Q 15 Hだからね」

「キュウキュウ・ジュウニハとジュツキュー・ジュウゴハ……」

初めて聞く珍しい言葉の響き、まるで呪文みたいだ。そうか、秘密の扉を開ける呪文なんだな。私は忘れないように、頭の中でキュウキュウ・ジュウニハ、ジュツキュー・ジュウゴハと繰り返した。

一九八一年二月二日 唐川ビル『P』編集室

「小形くん、悪いけどお使い頼める？」

佐野さんが編集室の扉を開けて、私に呼びかけた。作業室で通販の発送作業をしていた私は答えた。

「いいですよ」

佐野さんの頼みならよろこんで、心の中でそうつぶやく。佐野さんは毎号『P』の表紙を担当しているデザイナーだ。すらりとした美しい人だが、残念ながら編集長の奥さんでもある。

佐野さんはどうしてあの、いつも不機嫌な編集長と結婚したのだろう。ある日疑問に思っ、数年前から編集部に出入りしていて何でも知っている高校中退の山ちゃんに聞いた

ことがある。するとしたり顔で、二人は幼馴染みで、ずっと若い頃に編集長が拝み倒して一緒になったんだよね、と教えてくれた。そばで聞いていたラブコメと時代劇好きの女子大生、芝ちゃん「断り切れなかったのね——」とため息をついた。

「この原稿を駒津さんに届けてちょうだい。駒津写植は行ったことある？」

「いえ、初めてです」

「新大久保の駅の近くよ。〈地図帳〉から地図をコピーして持って行ってね。はいこれ」

差し出された大きめの茶封筒は、何回も写植屋さんとの間を往復している使い古しだ。

表面には原稿用紙を裏返しにしてセロハンテープで留められており、「駒津写植さま 広告原稿在中 佐野」と端正な字で横書きされていた。

私は佐野さんから茶封筒を受け取ると、編集室の真ん中の共有机に置かれた小さな本棚から、一冊のクリアポケットファイルを抜きだした。透明のポケットページずつに、写植屋さんだけでなく出版社などの取材先、かと思えばラーメン屋、あるいは現像所など、雑多な地図が入っていた。丁寧な手書きの地図もあれば、コピーの地図に赤丸を入れただけのものもある。その中から「駒津写植」と書かれた地図を探し出すと、コピー機で複写し、四つ折りにしてシャツの胸ポケットにしまった。

「じゃあ、いつてきます」

そう言う、私は共有機の引き出しから自転車のカギを取り出し、「お使いバッグ」と呼ばれている白いキャンバス地の共用バッグに茶封筒を入れると、コートを着込んで勢いよく外に出た。

見上げると、ビルの谷間に冬の青空が広がっていた。私は唐川ビルの横の駐輪場に回ると、薄汚れたママチャリを引き出した。ポケットから駒津写植への地図を取り出して道順を確認すると、スタンドを蹴り上げてペダルをぐいっと漕ぎだした。

同日、新宿区百人町一丁目、駒津写植

駒津写植は新大久保駅の裏手にある、何もかも古ぼけた鉄筋コンクリートのマンション一階にあった。一階のエントランスを入って、薄暗い共用廊下を進んだ一番奥が駒津写植のようだ。廊下を歩きながら、ガシャン、ガシャン、という写植機独特の音が聞こえてきた。よかった、駒津さんは出かけてないようだ。

「失礼しまーす、Pです。原稿をお持ちしました」

表札の「駒津写植」の文字を確認すると、そう言って私は金属製のドアを開けた。部屋奥には写植機が設置されていて、その前に半白の長髪で痩せた老人が回転式の丸椅子に

座り、ガシャン、ギー、ガシャンと写植を打っていた。

老人は私に背中を向けたまま「はい……」と気のない返事をする。それでも手早くリズムカルにレバーを上下する手は決して休めない。この人が駒津さんか、なんか気難しそうだな。

室内は白い壁ばかりが目立つ十畳ほどのワンルームで、部屋の三分の一は岩山のような写植機が占めている。部屋の奥左側には黒い遮光カーテンが掛かっていて、洗面所を暗室に転用しているようだ。写植機の手前には小さな机と椅子が置かれていて、上には緑色のゴムマットが敷かれている。緑色の写植糊の丸缶、それから烏口、シャープペンシル、カッターなどが刺さったペン立てもあるから、ここで版下制作や写植の切り貼りをしているのだろう。

「待たせたね」

しばらくすると、駒津さんはようやく手を止めて私の方に顔を向けた。六十歳くらいだろうか。金縁眼鏡の奥の眼光は鋭い。うわー、見るからに怖そう。

「これ、佐野さんの原稿です」

すこし緊張して差し出した茶封筒を受け取ると、駒津さんは「ご苦労さん」と言っ、座ったまま中から何枚かの原稿を取り出した。

あまり興味なさそうに手早く原稿を確かめていく、途中で「ん？」という感じで手を止めると、片手で眼鏡をはずし、一枚の原稿に顔を近づけて凝視する。しばらくすると目を離し、クククとうれしそうに笑いながら、誰に言うともなく駒津さんは呟いた。

「ひさしぶりに写植らしい指定を見たな」

それ、どういう意味ですか、という質問は呑み込んだ。私に向かって言ったようには思えなかったし、ヘタなことを聞くと怒られそうだ。私は駒津さんが機嫌のよいうちにお邪魔することにして、小さな声で「失礼します」と断って駒津さんに背を向けた。

一九八一年二月四日 唐川ビル『P』編集室

次の私の出勤日は、駒津写植に原稿を届けた二日後だった。午前十一時頃、「こんにちは」とドアを開けたが、まだ編集室には誰もいなかった。予想通りだ。私は共有机の上に置かれた、B4判ほどの大きさの浅いプラスチック製のカゴに近づいた。

カゴは二つ並べて置いてある。一つは写植屋さんに持っていく封筒を、そしてもう一つは写植屋さんから戻ってきた封筒を入れる。見ると戻ってきた方のカゴには、私が二日前に持って行った「駒津写植さま 広告原稿在中 佐野」と書かれた封筒がある。よしよ

し、私はその封筒を取り上げると、机の上に中身を取り出した。

あれから、駒津さんの「ひさしぶりに写植らしい指定を見たな」という言葉の意味が、ずつと気になっていった。「写植らしい指定」って、どんな指定なのだろう？ それを確かめるには、駒津さんが打った写植、それに佐野さんの写植指定を見るのが一番だ。今日はそれを確かめてやれと思って、少し早めに電車に乗ったのだった。

出てきた袋の中身は、三種類あった。まず縦横二十センチほどの比較的小さな写植の印画紙、それにホチキスで綴じた数枚の原稿用紙、そしてA4の割付用紙が一枚。まず私は印画紙を手にとった。

「これは……なに？」

その写植は太い罫線で囲まれた、ページ横半分のサイズの広告版下のようなだった。しかしよく分からないのは、そもそもこれは「版下」と言えるのかということだ。

通常写植屋さんはメインタイトルやサブタイトル、リード（短い導入文）、本文などを一枚の印画紙の中にうまく収まるように打つ（本文が長ければ別の印画紙に分ける）。版下制作者はその中から必要な文字をカッターで切り抜き、版下用紙に貼り込んでいく。写植を貼る前に、製図ペンで飾り罫や図版のアタリ罫など、罫線を引いておくことも大事な仕事だ。

村西さんに写植指定を教えてもらってから三週間ほどがたっている。あれから私は村西さんに教わりながら少しずつ仕事を覚え、最近は版下制作までやらせてもらえるようになっていた。それでも版下制作の道はなかなか険しかった。そもそも写植を真っ直ぐに貼ることがむずかしいし、それ以前の問題として真っ直ぐに貼るには写植の文字ギリギリにカッターで切り抜くことが必要なのだが、失敗して文字まで切ってしまったって台無しにすることもあった。ましてや製図ペンで真っ直ぐに、そして均一の細さで罫線を引くなど思いもよらない。村西さんは私が版下を作って持っていくと、黙ってコピー機で複写して、そのコピーに赤鉛筆で「ほら、ここ。ここも」と曲がっている写植の箇所にて規定で正しい線を引いてくれた。なかなか巧くできないな。どうしたら上手になるのかな。

ところが駒津さんが打ってきた写植はそもそも版下用紙には貼っていないし、カッターで切り貼りした形跡もない、単なる一枚の印画紙なのだ。それなのに、最初から大小の文字が整然とレイアウトされており、さらに罫線までもが写植だ。つまり、切り抜いて版下用紙に貼り付けるまでもなく、印画紙の段階で既に完成されている。なんだこれは？ この写植はこの数週間目にしてきたどんな写植とも違っていった。

その謎はすべて割付用紙にあるに違いない。なぜなら、佐野さんが作った割付用紙にしたがって、駒津さんはこの写植を打ったはずだからだ。私はA4の割付用紙を机の上に広

げた。

「うわあ、
きれい」